【124】

氏　名（本　籍）	松村（まつむら）　明（あきら）（東京都）
学位の種類	医　学　博　士
学位記番号	博　乙　第　546　号
学位授与年月日	平成元年10月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	**Intracerebral subependymomas. Clinical and neuropathological analyses with special reference to the possible existence of a less benign variant** **（脳内サブエペンディモーマ。臨床病理学的検討，特に良性度の低い亜型の存在の可能性について）**

主　査	筑波大学教授	医学博士	小　泉　準　三
副　査	筑波大学教授	医学博士	小　形　岳三郎
	筑波大学教授	医学博士	河　野　邦　雄
	筑波大学副学長	医学博士	澤　口　重　徳
	筑波大学教授	医学博士	林　　浩一郎

論　文　の　要　旨

〈目　的〉

Subependymoma は主として脳室壁に発生する腫瘍で，Scheinker（1945）がこの腫瘍の組織像が Subependymal glial layer の構造に似ていることから Subependymoma と命名した。その後この腫瘍の病態や成因について，炎症説（Russel と Rubinstein，1976）．奇形説（Clarenbach ら，1976：Ho，1983），過誤腫説（Kunicki，1965：Azzarelli ら，1978：曽我部ら，1978）など種々の学説が報告されて来たが，最近では腫瘍性病変と認識されつつあり（Salcman と Meyer，1983），Astrocytoma や Ependymoma から独立した一つの良性腫瘍とされている。

今回著者らは Subependymoma の手術標本で従来の報告にみられないような組織学的に強い核多形性を示す症例に遭遇したので，この腫瘍の病態をより明らかにする目的で臨床病理学的に検討した。

〈材料と方法〉

1981年から1986年迄の5年間に Göttingen 大学で観察した手術標本および剖検標本による Subependymoma 11例（症候性7例，無症候性4例〉を retrospective に臨床病理学的観点と Quantitative morphometry,DNA-Flowcytometry 等の方法を使用して検討した。

〈結　果〉

症候性のSubependymomaの7例中3例に組織学的に細胞密度が高く核多形性が著明な一群が見られ，またQuantitative morphometryにおいて核の大きさが通常のものに比して有意に大きいことが示された。また，これらはDNA～flowcytometryにてグリオーマGrade Iにくらべて増殖能が高く，ほぼGrade II~IIIに相当することが認められた。臨床症状や再発の有無，脳CTとMRIによる画像所見等では，核多形性などの組織学的に悪性な所見に見合う特徴的所見は得られなかった。

〈考　察〉

WHOの脳腫瘍分類（1979）ではSubependymomaはEpendymomaのVariantに含まれGrade Iの良性腫瘍とされ，またこの腫瘍は無症候性のものが多いことから“most benign glioma”ともいわれているが，本研究からSubependymomaの一群に強い核多形性や細胞の増殖能の高い症例が存在することを認めた。臨床的にも本腫瘍症例でごく稀に浸潤性の発育や再発例も報告されており，本研究からSubependymomaに関してこのようなVariantの存在も念頭において適切な診断や治療の上で対処する必要があると考えられる。

審　査　の　要　旨

従来Subependymomaは良性腫瘍とみなされてきたが，本研究はこの腫瘍のなかの一群には病理組織学的に比較的悪性の像を呈するものが存在することを明らかにしたもので，このことは脳神経外科領域の診断と治療の上で貢献するものと思われ，この成果は意義深く十分に医学博士論文の内容たり得る。

よって著者は医学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。